

ただ言葉になっていなくとも、『浄土三部経』の往生の正因たる心は皆同じであるという法然の意図は読み取れるのである。

しかし、ここで問題になるのは、一心不乱に対する散心の念仏であろう。次にこれに対する法然の見解を見ていきたい。

●第八節 散心の念仏

善導は、『観経』において三心の説かれている部分を「散善義」として、心が散った状態での往生の正因・三心を説くのである。すなわち、散乱した心だからこそ口に念仏を称え、誠の心で深く信じ往生しようと思うことが必要であるとするのである。

法然は『明遍僧都との問答』（『法全』六九二頁）の中で散心の念仏についてまず回答を残している。散心の念仏についてまず「源空もちからおよひ候はす」と言い、心が散乱状態であっても、仏願力によって往生しようとおおらかに念仏をすることが重要であると述べている。さらに、人間には目鼻があるように散心があるのだからそれを捨てようとしても難しい、散心ながらにして往生できるからこそ本当にありがたい本願なのである、と述べているのである。

このように見ていくと、法然の意図するところは散心の中に往生の正因たる三心があり、

それを突き詰めていくことによつて一心に帰するのだということになるうか。

●第九節 まとめ

法然は以上の問題のほかにも三心の退不退の問題、至誠心・深心・回向発願心の個々の解釈の問題についてもさまざまな言葉を残している。これらについてはここでは取り上げないが、これまでに述べてきたことでほぼ法然の基本的な三心に対する考え方が押さえられているものと思う。もちろん、法然の思想を調べるにあたっては、資料の信憑性つまりどこまでが法然の言葉でどこからが後世の付け足しであるのかまで踏み込んでみる必要があるが、また法然の語録を集大成した人が鎮西義の門下でありその思想の影響下にある語録と見るべきだとの批判があることも考慮に入れる必要がある。しかし、前で述べてきたことは『選擇集』、『観経釈』など比較的信頼できる資料を中心としたつもりであり、十分法然の根本思想を網羅しているものと考ええる。

法然上人の三心に対する基本的な思想を踏まえて、このあと門下の三心論を見ていきたい。